

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見てくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第6回

ブルー・カラーの世界に生きる
若者の怒りをパワーに変えた名曲

Bruce Springsteen
'Born To Run'



"Born To Run"
ブルース・スプリングステイン『明日なき暴走』
Columbia ●PC33795 [1975]
▶ソニー ●MHCP723

際には、ミドル・クラスだった。俺もミドル・クラスだったからこそ、ブルー・カラーの世界に憧れたんだろう。
アメリカの大学生もそうだ。男らしく、生命力にあふれた世界に憧れている。だから、ブルース・スプリングステインの音楽があらゆる人に受けたのだと思う。もちろんブルー・カラーの人たちにとっては、心強い代弁者だ。かつてアメリカでは、誰でも一生懸命働いて正しく生きていけば、アメリカン・ドリームが手に入ると思われていた。しかし俺は大人になってから初めてアメリカに住んだとき、車のメカニックとしてブルー・カラーの世界を見て、現実を知ったんだ。この曲の1行目はそのアメリカン・ドリームから始まる。

In the day we sweat it out
In the streets of a runaway American dream

「昼間、俺たちは仕事に精を出し、走っては逃げていくアメリカン・ドリームの道で汗をかいている」。アメリカン・ドリームという言葉はジェームズ・ツルズロウ・

ていく。コネがなくても、自分の力で勝負する。俺がロックを聴き始めた時も、その世界の曲ばかり。そういえば、医者や弁護士、金持ちの歌はあまり聴いたことがない。あつたとしても、金持ちの女の子に惚れたけど俺みたいなワーキング・クラスは相手にされないっていう歌が多かった。その後、俺はボブ・ディランのワーキング・マンの世界が好きになった。でも彼は実

アダムズという人が1931年に最初に使った。どんな人でもアメリカでは、もっとリッチで幸せな人生を掴める。独立宣言の2行目に書かれているコンセプトだ。All men are created equal。そして、誰にでも持っている権利がある。Life, liberty and the pursuit of happiness。誰だって家を持っている。これもアメリカン・ドリームだ。大学に行かなくても手に入る。

'Runaway American dream'。しかしアメリカン・ドリームは止められない汽車や馬車だらう。アメリカン・ドリームは俺たちが止めて乗れる汽車じゃない。

At night we ride through mansions of glory in suicide machines
Sprung from cages out on highway 9,
Chrome wheeled, fuel injected
And steppin' out over the line
Baby this town rips the bones from your back

彼らは夜になるまで、まったく違った世界へと足を滑らせていく。mansions of glory。車を走らせている道が、彼らに

て大きな邸宅だ。suicide machines。まるで自殺行為のように猛スピードで自動車やオートバイを走らせ、ハイウェイ9の檻から'sprung' (逃げる)。車は金をかけてクローム・ホイールやフェエル・インジェクテッドを加えてお洒落にした改造車だ。over the line。スタート・ラインを越えてくる。つまり、ケンカへのチャレンジャーだ。飛び出しているところまで、足を出してしまっている。この街にいと背骨まで抜かれてダメになれてしまう。アメリカでは責任感がない人や意気地なしのものを'He's got no backbone'、背骨がなくなっている。彼らは昼は手に入らないであろうアメリカン・ドリームのために一生懸命働いて、夜はその絶望感からソメをはずしてやる。しかも住んでいる街から出たかと思っている。

It's a death trap, it's a suicide rap
We gotta get out while were young
Cause tramps like us
Baby we were born to run

'rap'とは罪のこと。例えば'murder

rap'は人殺しの罪。詩に出てくる'death trap'は死の罠。It's a suicide rap'は自殺の罪だ。だから若いうちに俺たちは逃げ出さないと、俺たちみたいに転々と暮らしている奴らは生まれた時から逃げ回るしかないんだと絶望感にじみ出る。

Wendy let me in I wanna be your friend
I want to guard your dreams and visions
Just wrap your legs round these velvet rims
And strap your hands across my engines
Together we could break this trap
Well run till we drop
Baby well never go back
Will you walk with me out on the wire
'Cause baby Im just a scared and lonely rider
But I gotta find out how it feels
I want to know if love is wild
Girl I want to know if love is real

次からは想像しながら読んでもらいたい。ウェンディー、俺を入れてくれ。俺は君

の友だちになりたいんだ。あなたの夢と空想を守りたい。このヴェルヴェットのリムにあなたの足を絡めて手を俺のエンジンにストラップしてくれ。二人だったらこの罫を壊せるよね。倒れるまで俺たちは走り続けて二度と戻らない。俺とワイヤーの上を歩いてくれるか？ リスクがある綱渡りを一緒にしてくれないかという。だって、俺はただの怖くて寂しいライダー。でもどんな感じか知りたいんだ。愛はワイルドか、愛は真実か知りたい。

Beyond the palace hemi-powered drones
Scream down the boulevard
The girls comb their hair
In rearview mirrors
And the boys try to look so hard
The amusement park rises bold and stark
Kids are huddled on the beach in a mist
I wanna die with you Wendy
On the streets tonight
In an everlasting kiss

城の先には、ヘミを積んだドローンが叫



ぶように道を走って行く。ヘミは60年代のアメリカのクライスラー社が使っていた、パワフルなエンジンの名前。ドローンは見せかけのツワモノのことをいう。つまり、見せかけだけの車が高級住宅地の回りを走り回っているという意味だ。車の中では女の子たちがバック・ミラーを見て髪をとかす。そのバック・ミラーには同じ世界に生きる自分の母親を投影している。そして男たちは自分の気持ちに嘘をつくように、格好をつけている。遊園地は暗い夜空に大胆にスツクと立っている。次の「Kids are huddled on the beach in a mist」は直訳すると、若者たちは海のミストの中で固まっているとあるが、若者たちはお互い寄り添いあつて、何かから隠れているという感じだ。社会や寒さから隠れているのだからアメリカの遊園地は、その昔は海や湖のそばにあった。ブルースの地元に近いアズベリー・パークにも昔はあつたが、今はもうニューヨークのコーニー・アイランド以外はほとんど閉園し、移動遊園地がほとんどだ。夏になるとどの街でも、ファアと呼ばれる祭りがあつて、そこには若者たちが集まり、様々な乗りものやゲームをしてデートを楽

しむ。日本の祭りにもちよつと似ている。そしてまた最後にこんなことをいう。ウエンディ、俺は今晩あなたと一緒にこの道で死にたい。永遠のキスの中で。ロマンチックで切ないフレーズだ。

The highways jammed with broken heroes
On a last chance power drive
Everybody's out on the run tonight
But there's no place left to hide
Together Wendy well live with the sadness
I'll love you with all the madness in my soul
Someday girl I don't know when
Were gonna get to that place
Where we really want to go
And well walk in the sun
But till then tramps like us baby
We were born to run

ハイウェイは最後のチャンスしか残っていない。パワー・ドライブが壊れたヒーローたちでいっぱいだった。今晩は皆が走り回っ

ている。でも隠れるところはない。ウエンディ、俺たちはこの悲しみと生きていく。俺の魂のなかのマッドネスで、あなたを愛する。いつかわからないけど、本当に行きたい場所にたどり着けるだろう。そこで太陽の下を歩こう。アメリカでは、*in the sun* = 太陽の下を歩くというのは、成功したということだ。だけどその時が来るまで走り続けよう。俺たちみたいな流れる者は走るために生まれたんだ。

ブルース・スプリングステインはニュージャージーのブルー・カラーの世界から出てきた。父親はバスやトラックの運転手をし、生活は苦しかったと言われている。ブルー・カラーの人たちは、いつも自分たちが社会の片隅にいると思っている節がある。そんな気持ちを感じているブルーだからこそ、この曲にはパワーがあるんだろう。

俺は車のメカニックとしてブルー・カラーの世界を見て、似たような気持ちを味わった。メカニックは責任がある仕事なのに、認められないことがネックだ。例えば修理のとき、ネジを1ミリ回し過ぎたらネジが折れて事故になる可能性は高い。人が死ぬ

こともある。それなのにメカニックは軽い扱いを受ける。同じブルー・カラーの人たちなら車や家を自分でいじって直すこともあるから、説明すれば車のことを理解してくれる。でも俺の経験では、エリート・ビジネスマンや医者や弁護士は丁寧にアドヴァイスしようとしても聞き入れない人が多い。鼻からバカにした態度をとられるんだ。アメリカでは誰でもアメリカン・ドリウムを掴めるはずなのに、ブルー・カラーの人たちはその世界には入れない。手にあるのはプライドだけ。その怒りをパワーに変えた曲が「ボーン・トゥ・ラン」だ。アメリカ人はよく「こんなふう」にいう。「Where is our piece of pie?」俺たちのパイの欠片はどこにあるんだ。そんな怒りが見え隠れする。曲の始まりから、何か起きるぐらいのテンションを感じる。車がまるでレースのスターティング・ラインに並び、エンジン音を吹かしているようだ。夢を探して、どこかに行こうとしているエネルギーに満ちている。でもブルー・カラーの人たちは、そこから逃げ出す心の余裕やお金もない。だからいつまでも走り続ける。それがこの曲のテーマだ。